



今なお輝きを放つ日本の甲冑

日本の甲冑が世界各地の甲冑に比べて色鮮やかで美しいと言われているのは、様々な素材と技術が複合的に用いられているからである。美術工芸的に優れた作品として海外でも注目されている日本式甲冑の変遷と特徴、復元製作について探る。

(左) 浅葱系威最上腹巻／原品は安土桃山時代、西岡甲房製作、(右) 黒糸威二枚胴具足／原品は安土桃山時代、西岡甲房製作

平安時代に誕生した日本独自の甲冑様式

甲冑とは、弓や刀槍、銃などの武器による攻撃から身を守るための武具である。胴体に着けるものを鎧(甲)、頭にかぶるものを兜(冑)と呼ぶ。日本古代の甲冑は腰から上を守る鉄製の「短甲」と「挂甲」で、中国や朝鮮の様式が模倣されていた(図1)。

大陸の影響から脱し、「大鎧」という日本独自の形式が作り出されたのは平安時代末期である。素材は鉄、牛生皮、鹿鞣革、組紐、染織品などで、装着者の身分が高いほど高度な技術が結集された。その後、大鎧、銅丸、腹巻の3形式となり、大鎧には大袖と兜が付いた。

今に残る大鎧は全国の神社や博物館に収蔵されて

いる。中でも、赤糸威大鎧(東京都青梅市／武蔵御嶽神社)、小桜草威大鎧(広島県廿日市市／厳島神社)、紺糸威大鎧(愛媛県今治市／大山祇神社)はどれも国宝で、「日本三大大鎧」と呼ばれている。

「当世具足」の登場で大量生産が可能に

大鎧から始まった日本式甲冑は、室町時代末期に「当世具足」が登場したことで転換期を迎えた(図2)。「当世」は現代を示し、「具足」は十分に備わっていることを意味する。戦法が集団戦や鉄砲戦になったことで、高い防御性と着脱のしやすい甲冑を大量生産する必要が出てきたことから、新しい様式の甲冑が登場したのである。

古墳～奈良時代	平安時代以降	鎌倉時代以降	室町時代末期以降
<p>短甲:腰から上を防御する丈の短い鎧。</p> <p>挂甲:短甲よりも丈が長い鎧。革や鉄の小札を紐などで綴じて作られた。</p>	<p>大鎧:騎射戦での防御機能と豪壮華麗な形態美を併せ持つ甲。</p> <p>胴丸:徒歩で戦う一般武士用の簡便な甲。右脇で引き合わせて装着する。</p>	<p>腹巻:胴丸の次に防御力が高く軽い武具。背中で引き合わせて装着する。</p> <p>腹当:胴の前面のみを守る最も簡便な甲。</p>	<p>当世具足:軽量で動きやすく、面頬、籠手、佩楯、臙当などの防具を備えている。</p>

図1 甲冑の種類・特徴と変遷



図2 当世具足を構成する基本部位

大鎧は、革製の「小札」(図3)を一枚ずつ紐でつないで製作するため、手間がかかり、大量生産には向かなかった。それに対して、当世具足は胴部の小札を大きくしたり、一枚板(板札)に置き換えることで構造が簡素化し、量産が可能になった。また、鉄製の小札や板札を用いることで防御性も向上した。板札による胴部を縦方向に複数に分け、蝶番でつなぐことで、開閉が自在になり着脱も容易になった。

戦国時代には西洋から輸入した甲冑(プレートアーマー)を改造した武具も登場し、それを「南蛮胴具足」と呼んでいた。日本と西洋の甲冑の違いは、主に防御力、重量、動きやすさにあった。

当世具足は脇や首回りに防御の薄い部分があったが、プレートアーマーは頭からつま先まで鉄板で覆い尽くされていたため、弓矢や刀剣による攻撃をほぼ防ぐことができた。その反面、一般的な当世具足の重量は10~20kg前後なのに対し、プレートアーマーは約40kgもあったため、装着者の体力を消耗させた。長時間の戦いにも向いていた点では、当世具足に軍配が上がっていたと言える。なお、甲冑に使用した鉄は、そのほとんどが国内で出回っていたものだと考えられている。しかし、それらを職人がどのようなルートで仕入れていたのかは明らかになっていない。

装着者の存在感を誇示した「兜」

室町時代末期に発達した兜は、堅牢で刀槍や銃弾に



図3 鉄や革などでできた「小札」



図4 兜鉢の種類

よる攻撃をそらしやすく、団体戦で衆目を引くことが留意された。その本体に当たるのが「兜鉢」(図4)である。

素材にはまれに革も用いられたが、主流は硬くて強い鉄であった。しかし、当時は鉄が希少で容易に手に入らなかったため、薄くて細長い鉄板(矧板)をつなぎ合わせて構成する「筋兜」が登場した。当初は20枚程度だった矧板はやがて62枚が標準的となり、多いものでは200枚程度のものまで出現した。

その一方で全国的な争乱により甲冑の需要が増えたことから、兜鉢を鉄板4枚で構成した「桃形兜」が大量に生産された。これは西洋の南蛮兜の影響を受けたもので、頭頂部が尖り、桃の果実のような形をしていることから、この名称が付いた。日本刀や槍による攻撃を滑らせやすい上、筋兜に比べると製作にかかる手間が少なく量産に適していたことから、身分の上下を問わず多くの武士に使用された。

日本の兜は、鉄地に酸化処理による黒錆加工を施すことで腐食を防ぎ、同時に重厚感や落ち着きも表現されていた。中には金箔を押して輝きを出すものもあったが、褐色に仕上げることが多かったのは、質素で素朴な雰囲気気を好む日本人の美意識がもたらしたものと思われる。

また、兜には動物や植物、日や月などをモチーフにした「立物」を付けることが多かった。それらの装飾は立てる位置によって名称が変わり、前面を「前立」、側面を「脇立」、頂点を「頭立」、後部を「後立」と呼ぶ。材料は鉄、銅、金、銀、木材、動物の角や牙、皮革など様々で、装着者の威厳と存在感を誇示していた。立物の代表的なものとしては、徳川家康の齒朶、伊達政宗の三日月、直江兼続の「愛」の文字などが挙げられる。

甲冑の復元製作に取り組む甲冑師

金属加工、漆工、木工、染織、裁縫など、様々な技法を要する甲冑製作は、甲冑師と呼ばれる職人によって行われていた。しかし、明治維新から150年以上経った今、文化財としての甲冑の復元・修理を行える者は日本に2人しか存在しないとされている。その一人が、文化庁認定の「選定保存技術保持者」である西岡文夫氏であり、神奈川県横浜市内に「西岡甲房」(図5)を構え、現代の甲冑師として貴重な武具の数々を蘇らせている。

同氏は、可能な限りその時代と同じ材料や技法を用いることを意識している。修理の場合は、できるだけ余計な手を加えず最低限の保存や鑑賞に堪えられるように心がけ、復元の場合は甲冑に限らず当時の様々な文化財を参考にし、全体的なバランスと原品の雰囲気を大切にしているという。下準備にかかる期間は通常数カ

月だが、劣化の激しいものになると他の仕事と並行しながら3~4年の歳月を費やすという。同氏の弟子であったイギリス人の男性が、身につけた技術を活かして母国で日本式甲冑の修復に取り組んでいるというのも興味深い。

「用の美」を支える技法と漆工の重要性

甲冑製作に用いられる部品数は、平安時代の大型の場合には数百程度だったが、江戸時代の当世具足になるとその数は数え切れないほど多くなったと言われている。当時はそれぞれの部位の製作が分業化されていたが、現在は一人の甲冑師がほぼ全てを行い、組み立てまでの一貫作業に取り組んでいる。

甲冑を構成する基本素材は小札、威毛、金具廻、金物、絵草で、そこには甲冑の機能に美しさを加えた「用の美」を支える様々な工芸技法が施されている(図6)。

小札は主に鉄、革でできた長さ5~8 cm、幅4 cm程度の小さな板で、何枚もつなぎ合わせて胴、袖、草摺などが作られる。

威毛は、小札を一段ずつ上下につなぐ(威す)ための絹や革でできた紐で、威した紐が並ぶ様子が鳥の羽毛に似ることから、この名称が付いた。

金具廻は、小札部分や兜鉢を除いた鉄や革製の板の部分のことを指す。覆輪と呼ばれる鍍金加工をした金属の縁取りを施すことが多い。

金物には金、銀、銅の素材を用い、精緻な技術で製作される。甲冑全体に散りばめることで多くの部位を華やかに演出する。

絵草には柔らかな鹿の革が用いられる。獅子、牡丹、



西岡文夫氏 / 甲冑師

1953年、佐賀県伊万里市生まれ。グラフィックデザイナーを経て25歳で甲冑師になる。一般社団法人日本甲冑武具研究保存会副会長。文化財保護修復学会会員。



技術力の向上に努めるスタッフ

西岡氏によって復元された国宝赤糸威鎧(青梅市郷土博物館蔵)。甲冑師を目指した時から憧れていた甲冑だけに、原品を実際に手で触れながら復元できたことに感動したという。



図5 甲冑の復元・修復を行う「西岡甲房」



小札を一段ずつ縫じ付ける「威毛」の作業



甲冑の装着に必要な留め具「鞆」の製作



極上の刷毛を用いた丁寧な漆塗り

図6 繊細さが求められる復元製作工程

不動明王といった文様を藍色や朱色に染め付け、大鎧や銅丸、腹巻など随所に施す。

また、甲冑師の仕事で重要になるのが漆工である。威毛で威した小札に漆を塗るのは日本古来の伝統的な技法であり、漆を焼き付けることで硬度が増し、防錆効果も生まれる。

漆塗りは一度ではなく、乾かしながら何回も繰り返される。また、その都度炭を用いて研ぎ、面を平滑にする。特に最後の仕上げとなる上塗りでは、ごみが付着したり刷毛目が出ないように、漆の濃度や温度を調整しているという。また漆は室内の温度・湿度に影響されるため、冬場もそれぞれ25～30℃、60%以上に保つことのできる「漆風呂」と呼ばれる箱の中で乾燥させている。

日本古来の技法による組紐づくり

威しに使われる「組紐」も、甲冑製作の重要な要素となる。組紐は絹糸を交差させて作られる。ただし、甲冑に付属するものは着物の帯締めなどに使用されるものとは

違い、日本古来の技法を再現した最上級品である。その復元製作を行っているのが、夫人の西岡千鶴氏である。

現行の組紐は江戸時代以来の技法を用いることが多いが、千鶴氏が取り組んでいるのは「組手」という台に絹糸を結び付けて組む「クテ打技法」である(図7)。昭和初期に一旦途絶えてしまったが、1980年に日本人の組紐研究者によって復元され、北欧や中央アメリカ、インドなどで多く利用されている。しかし、日本で仕事として取り組んでいるのは千鶴氏のみである。

甲冑師が甲冑製作を一通り行えるまでになるには20年以上かかると言われ、この道45年になる西岡氏でも未知の部分が多くあるという。西岡氏は、「甲冑の世界は奥が深く、広い。昔の人が丹精込めて作り、使われてきたものを、現代の人々にも関心を持ってもらえればありがたい」と話す。甲冑は日本の歴史を考究する上でも重要な役割を果たすものだけに、復元技術の継承によって末永く後世に受け継がれていくことを願うばかりである。

●取材協力 西岡甲房 ●文 杉山香里



複雑な作業を一人で行えるように開発した独自の組台で組紐を組む西岡千鶴氏

植物のベニバナで染色された甲冑用の組紐に使用する絹糸



鎌倉時代の紺紙金字法華経(東京国立博物館蔵)に巻かれていたものを復元した組紐

図7 「クテ打技法」による組紐製作